

そして、

地球環境核戦争が始まった

北里環境科学センター
理事長／宇宙生命学者

伊藤 俊洋

ピフミッド型学問大系とノーベル賞

前回の学問の階層性の中で、私は、人類の文化的活動も自然現象として捉えるべきであると述べた。心理学の精神世界では、往々にして超自然的な概念が入りがちであるが、近代原子論に基づいて考察する限り、超自然現象は起こり得ない。宇宙で起こっていることは総て自然現象であり、自然現象である限り、将来的には総ての現象が自然科学的に解明される筈である。現在、解明されていないのは、その学問が未だ発展途上であって、これから進化してゆく伸び代がある証拠である。

近年、大学教育で文系学部の必要性が過小評価され、逆に理系学部が優遇される傾向にあるが、これは大きな誤りである。本来、学問は、人類の長年の努力が積み上がってきたものであり、学問の間に格差はない。それぞれの学問は、深い根っこの部分では、互いに繋がりが合い、助け合い、補い合っているのである。

心理学に関係する人が、総て生物学や、化学、物理学に秀でている必要はないが、基本的な学問大系を理解しておくことは重要であると思う。少なくとも義務教育の段階では、広い視野のもとに総ての学問の基本的な教育を受けるべきであり、

その教育を担当する先生達は、より広い知識・教養・教育技能を持ち合わせていなければならない。さらに、教育行政を担う国家の役人や政治家も、この統一的な学問大系の意味をしっかりと理解しておく必要がある。

ノーベル賞の生みの親であるアルフレッド・ノーベルは、学問的にも非常に視野の広い、先見性のある科学者であった。その根拠の1つが、ノーベル賞の対象分野である。ノーベル物理学賞は物理学の、化学賞は化学の、医学・生理学賞は生物学の分野に対する賞で、ノーベル文学賞は心理学の分野を代表して、さらにノーベル平和賞は総ての学問を縦断するいわゆる文明賞と考えると、学問大系の階層性を充分に意識して表彰しているように思える。経済学賞はノーベルの没後、ノーベル財団の判断で追加されたものであり、ノーベル数学賞がないのも頷ける。2016年にホプ・テイルンが文学賞を受賞したのも、文学と音楽の共通性を考えると、全く問題ないし、ノーベル財団の視野が時代と共に広がってきた証拠でもある。さて、これからの原発は、どんな形でノーベル賞の対象になるのだろうか。



ノーベル賞子ヨコ